

令和 5 年 5 月 14 日現在

機関番号：33919

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2022

課題番号：15K02844

研究課題名(和文) 15～16世紀の水干害と再開発に関する研究

研究課題名(英文) Research on Flood Damage and Redevelopment in the 15th and 16th Centuries

研究代表者

伊藤 俊一 (ITO, Toshikazu)

名城大学・人間学部・教授

研究者番号：50247681

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：15世紀から16世紀の水旱害とその復旧・再開発について14世紀からの流れも合わせて検討した。14世紀半ばの洪水からの復旧は荘園領主が派遣する代官や在地の荘官層によって担われた。14世紀末には荘官層の一部が没落し、代官支配も困難に陥る一方、名主層の開発意欲は強かった。しかし15世紀第 四半期には気温と降水量が共に増加する異常気象が生じ、諸荘園は深刻な洪水と旱魃に襲われて大きなダメージを受けた。そこからの復旧は従来の荘園支配の仕組みではうまく行かず、国人や土豪などの在地勢力による取り組みの持続性が高かったため、結果として荘園制社会の解体を招いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

気候変動がどのように社会システムに影響を与えて変化させていったかを日本中世後期社会について検証した。14世紀半ばの水旱害には従来の荘園制の仕組みで対応できたが、復旧の担い手である荘官や代官の窮乏化や弱体化を招いた。15世紀第 四半期に襲った異常気象には弱体化した復旧のシステムは働かずに社会は混乱し、復興の担い手の交代と旧来のシステムの解体を招いたという道筋を実証した。この道筋は他の時代や現代社会にも適用することができるだろう。

また気候が良好であれば生産力が高まり、不良なら低迷という素朴な気候決定論をから離れ、社会システムにストレスを与えて変容させる気候変動という新たな視点を切り開いた。

研究成果の概要(英文)：The recovery and redevelopment of water and drought disasters from the 15th to the 16th centuries were examined, taking into account the trends from the 14th century. The restoration from the mid-14th century floods was undertaken by the deputies dispatched by the manor lords and the local manorial officials. By the end of the 14th century, some of the manorial officials had declined, and the control of deputies became difficult due to uprisings by the manor tenants, while the manor tenants were eager for development. However, in the second quarter of the 15th century, abnormal weather patterns with increased temperatures and precipitation occurred, and various manors suffered severe floods and serious droughts, resulting in significant damage. The recovery from there could not be handled by the traditional system of manorial control, but the efforts of local powers such as countrymen and local gentry proved to be more sustainable, leading to the dismantling of the manorial society.

研究分野：日本中世史

キーワード：災害史 環境史 荘園史 農業史 日本中世史

1. 研究開始当初の背景

中世後期の荘園制は「室町期荘園制」と呼ばれるシステムとして維持されたことは井原今朝男や申請者等により明らかにされた。この体制は14世紀末から15世紀前半には「応永の平和」と呼ばれる繁栄を見せるが、15世紀半ばを境にして年貢収取の減少が顕著となり、深刻な危機に陥った。

この危機の原因については従来、武家による荘園侵略や、農民闘争の高揚などの政治的要因が考えられてきたが、当該期の百姓等の申状には、洪水・干魃による用水・耕地・作物の甚大な被害と、用水・堤防の修築のための井料の助成を求める文言にあふれていることから、経済的要因を考えてみるべきである。

藤木久志は播磨国矢野荘の年貢損免要求について、農民闘争よりも前に災害の結果ではないかと問題提起し、名主百姓等が相次ぐ被災の現実とどう向き合い、水害とどう格闘したかという視点で分析している。また藤木は『日本中世気象災害史年表稿』(2007年)を刊行し、中世の気象災害の基礎史料を提供した。水害史については宝月圭吾以来の研究の蓄積があるが、その実態や当時の社会に与えた影響、その結果としての歴史的影響については、藤木の問題提起と近年の古気候学・考古学研究の進展を踏まえて、文献史学の側からも改めて包括的な研究を行うことが求められている。

2. 研究の目的

中世荘園制は15世紀半ばを境に年貢収取の減少が顕著となり深刻な危機に陥った。従来、この危機の原因を武家の荘園侵略や土一揆等の政治的要因に求めてきたが、これに先だって大きな水干害が連続しており、耕地・用水の毀損による農業生産の被害と復旧の負担が危機の背景にあったことが推測される。本研究は中世終末期の15～16世紀を主な対象に、気候・環境変動をめぐる古気候学・考古学の研究を参照しつつ、年貢帳簿・土地台帳類の収集と正確な読み込み、現地調査によって、各地の水干害の被害と復旧・再開発の状況を復元すると共に、復旧・再開発をめぐる荘園領主・代官・在地領主・土豪・村落等の諸階層の活動と軌轢を解明し、当該期の水干害への対応が中近世の社会的転換に与えた影響を検証することを目的とする。

3. 研究の方法

15世紀から16世紀までの期間を中心として、できるだけ多くの荘園・所領について、年貢帳簿類の正確な読み込みによって年貢収取の増減を明らかにし、水干害に関する記録や気候データとも対照して、水干害が農業生産にどの程度の影響を与えたかについて検証する。

土地台帳が伝来している荘園について、各年代の台帳の記載を比較して耕地や用水の興廃を復元し、これを荘園故地の現況や近世の村絵図等と照らし合わせることによって、当時の水干害が耕地と用水に与えた影響を具体的に明らかにする。

水干害の被害、耕地と用水の復旧・再開発に伴って発生した用水相論や荘家の一揆の事例を分析し、そこから当時の復旧・再開発の状況を復元すると共に、復旧・再開発をめぐる荘園領主・代官・在地領主・土豪・村落等の諸階層の活動と軌轢を解明する。

16世紀になると、荘園領主・代官にかわって在地の国人・土豪・惣村が再開発の担い手になると想定されるが、年貢帳簿・土地台帳・売券等の分析と現況調査・村絵図等の調査によって当時の再開発のあり方を解明する。

4. 研究成果

東寺領山城国上野荘(上桂荘)について、土地台帳や年貢帳簿をデータベース化して、年貢収取の増減を明らかにすると共に、GISも利用しながら絵図と空中写真の読解と現地調査によって、水害と再開発による耕地の変遷を復元した。また上野荘の復旧・再開発の担い手についても文書から復元した。その結果、上野荘については、洪水と河道遷移のインパクトを受けながら、再開発を担う主体が在地領主の下司から請負代官へと変遷したことが明らかになった。この成果を「山城国上野荘の水害と再開発」という論文にまとめ『日本史研究』675号に掲載された。

播磨国矢野荘、山城国上久世荘・下久世荘の年貢散用状をデータベースに入力し、年貢収納高と河成等の変遷をグラフ化し、上野荘を加えた4荘園に共通する傾向と異なる傾向を分析した。その結果、年貢収納高の変遷については概ね4荘園に共通していたが、立地条件により上野荘は洪水、矢野荘は干魃の影響を受けやすかったこと、上野荘・上下久世荘では請負代官や村落結合の活動により復興に成功したが、矢野荘では立地条件と政治的混乱のために失敗したという見通しが得られた。この成果を「14～15世紀における荘園の農業生産の変動—播磨国矢野荘を中心に」という論文にまとめ、『気候変動から読みなおす日本史4 気候変動と中世社会』(臨川書店)に収録された。

総合地球環境学研究所の中塚武教授が率いる研究プロジェクト「高分解能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索」に参加し、そこで得られた降水量と気温のグラフと比べると、洪水や干害のイベントと降水量と気温の変動とがよく対応していること

が判明し、古気候学研究と歴史学研究の重要な接点を得られた。この成果を「高分解能古気候復元による中世農業史研究の転換」という論文にまとめ『気候変動から読みなおす日本史 1 新しい気候観と日本史の新たな可能性』に収録された。

15世紀後半の耕地の荒廃状況とその要因について検討した。播磨国矢野荘について14世紀初頭に作られた検注帳と現地の地形・水利条件を対照して、立地条件、水利を復元した。また検注順序から各名の田地の所在の復元を試みた。矢野荘の故地は圃場整備が行われて久しいが、1970年代のカラー空中写真からフォトグラメトリソフトを使って圃場整備以前の地形の3Dモデルを作って復元の参考にした。そして15世紀後半の内検帳から田地の立地条件別の耕地の荒廃状況を推定し、東寺文書研究会で発表した。

本研究の成果をふまえて、災害史・荘園史・村落史研究、ひいては歴史学全体にレジリエンス論の考え方が応用できることを提起したレビュー論文「災害史研究と村落のレジリエンス 海老澤衷編『中世荘園村落の環境歴史学』を読む」(歴史評論 845号)を発表した。

なお、本研究の成果を取り入れて日本荘園史の通史を叙述した『荘園 - 墾田永年私財法から応仁の乱まで』(中公新書)を刊行し、大きな反響があった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 伊藤俊一	4. 巻 845
2. 論文標題 災害史研究と村落のレジリエンス 海老澤衷編『中世荘園村落の環境歴史学』を読む	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 伊藤俊一	4. 巻 4
2. 論文標題 14～15世紀における荘園の農業生産の変動ー播磨国矢野荘を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『気候変動から読みなおす日本史4 気候変動と中世社会』	6. 最初と最後の頁 259-294
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 伊藤俊一	4. 巻 97
2. 論文標題 書評 似鳥雄一著『中世の荘園経営と惣村』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 民衆史研究	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 伊藤俊一	4. 巻 681
2. 論文標題 書評 志賀節子著『中世荘園制社会の地域構造』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 63-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤俊一	4. 巻 675
2. 論文標題 山城国上野荘の水害と再開発	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤俊一	4. 巻 通史編 2 中世 1
2. 論文標題 気候変動と中世社会	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 愛知県史のしおり	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤俊一	4. 巻 1
2. 論文標題 高分解能古気候復元による中世農業史研究の転換	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『気候変動から読みなおす日本史 1 新しい気候観と日本史の新たな可能性』	6. 最初と最後の頁 131-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 伊藤俊一
2. 発表標題 播磨国矢野荘の開発と荒廃
3. 学会等名 東寺文書研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤俊一
2. 発表標題 『大山喬平・三枝暁子編『古代・中世の地域社会 - 「ムラの戸籍簿」の可能性』を読む 川端・花田・三枝・吉永論文 書評報告
3. 学会等名 「ムラの戸籍簿」研究会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤俊一
2. 発表標題 播磨国矢野荘の農業生産と気候変動
3. 学会等名 東寺文書研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤俊一
2. 発表標題 山城国上桂荘の耕地の変遷と再開発
3. 学会等名 読史会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 伊藤 俊一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 312
3. 書名 荘園	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------